国語科学習指導案（中学校３年生）

１．単元名

単元６いにしえの心を受け継ぐ「夏草」―「おくのほそ道」から　松尾芭蕉　（光村図書）

単元５古典に学ぶ「おくのほそ道」松尾芭蕉　（三省堂）

単元５伝統文化を受け継ぐ　「おくのほそ道」（東京書籍）

２．単元の目標

（1）　現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ることができる。【知識及び技能】

（2）　①「おくのほそ道すごろくゲーム～芭蕉さんと行く 2400 キロの旅～」によって、人生をかけた芭蕉の旅を追体験し、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

②芭蕉の生き方や考え方にふれ、「俳聖・松尾芭蕉」を一人の人間としてとらえ直す中で、生徒自身の思いや体験を見つめ直し、考えをまとめることができる。

③「おくのほそ道」連句会によって、相手の思いをふまえながら、自分の考えが伝わるように付句の表現を工夫することで、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。

【思考力、判断力、表現力等】

（3）　言葉のもつ価値に気づくとともに、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

３．単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知っている。 ○「おくのほそ道」の表現の特色や俳諧について理解している。	○松尾芭蕉の生涯について知り、その人物像や生き方について考えたことを知識や経験と結びつけ、自分の考えを広げたり深めたりしている。	○コンテンツの様々なページを積極的に活用し、古典に表れたものの見方や考えを知り、自分の考えを説明したり、創作活動をしたりしている。

４．単元の概要（全７時間）

第１次【教科書の読解】（４時間）

・古文独特の表現の仕方や文体に注意して「おくのほそ道」の旅立ち、平泉を朗読し、芭蕉のものの見方や感じ方を読み取る。

第２次【デジタルコンテンツによる協働学習】（１時間）

「おくのほそ道」連句会を通して芭蕉のめざした蕉風俳諧を知り、グループによる連句の創作によって言語感覚や感性を高め、共同制作の楽しさを味わう。

第３次【個別学習及び交流】（２時間）

・「おくのほそ道」や俳諧など、自分の調べたい課題を見つけ、「私の芭蕉さん」レポートとしてまとめる。学年発表会などを通して交流する。

５．コンテンツのコンセプトと期待できる効果

松尾芭蕉は三重県に生まれ、高い芸術性を持った蕉風俳諧を創始した、江戸時代前期の俳人である。彼が記した「おくのほそ道」は日本を代表する紀行文学の一つである。元禄２年３月に江戸を出発し、東北地方の歌枕の地を訪ね、大垣（今の岐阜県）に帰るまでの全長約 ６００里（約 ２４００km）、１５０日間を超える大旅行の体験や見聞を記している。その旅立ちの冒頭部分や平泉は中・高の教科書に掲載される定番の古典である。

「おくのほそ道」連句会について

「おくのほそ道」の旅は、各地の人々に蕉風俳諧を広げる旅でもあった。「おくのほそ道」連句会は、芭蕉が各地の人々と俳諧を作り合い、交流を深めた連句の会について知り、グループで連句づくりを体験できるコンテンツである。

◆俳句が生まれるまでの日本の詩の歴史をたどることができる。

◆大石田に残る「さみだれを」歌仙から、複数の作者で作る「連句」の形式を学べる。

◆ワークシートを使ってグループで言葉を磨くコミュニケーションの場を体験することができる。

◆連句参考作品によって他校の連句作品を学ぶことができる。

６．**第２次の授業例**

（１）「おくのほそ道」連句会の目標

・大石田に残る「さみだれを」歌仙から、芭蕉の旅の目的について理解を深める。

・連句の形式や決まり、表現の工夫を知り、複数の作者で作る連句の魅力について考える。

・グループによる連句づくりを通して、仲間によって発想が広がったり、創造性が高まったりするコミュニケーションの場を体験し、自分の言語感覚を磨く。

（２）本時の指導過程（５０分）

	主な学習活動	指導上の留意点
導入	１．前時のふりかえり 芭蕉の旅が現代の旅と違うことが分かったが、芭蕉は各地で人々とどんな交流していただろうか。	●「おくのほそ道」すごろく板 すごろく板をスクリーンに映し、「おくのほそ道」の全旅程を確認する。
	２．芭蕉の旅の目的についてさらに考える。	

展開	芭蕉が訪ねた土地、須賀川、大石田、酒田の本文をヒントに考えてみよう。 **●すごろく須賀川** 脇・第三とつづけて三巻となしぬ。(この発句をもとに脇句・第三句と続けて、三巻の連句としてしまった。) **●すごろく大石田** わりなき一巻残しぬ。(やむをえず、連句一巻を残したのだった。) **●すごろく酒田** 俳諧一巻あり。(俳諧の連句一巻を作った。)	すごろくの各マスの本文にアンダーラインを引いて示し、共通して出てくる連句に注目させる。
	連句と発句(俳句)の違いは何か、最上川舟番所に説明があるので読んでみよう。 **●すごろく最上川舟番所**	芭蕉が地元の人々と詠み合った歌仙の形式や、自筆の懐紙を示しながら、連句はグループで創り上げる詩であることを説明する。
	３．連句づくりにチャレンジしよう。 **●「おくのほそ道」連句会** ・詠み方のコツ①から⑥、進行方法①②について教師の説明を聞き、連句会のやり方を理解する。俳号を決めたい人は決める。 ・発句にする芭蕉の句を選び、季語を確認する。 **●尾花沢** 涼しさをわが宿にしてねまるなり(夏) **●立石寺** 閑かさや岩にしみ入る蝉の声(夏) **●金沢** あかあかと日はつれなくも秋の風(秋) **●種の浜** 波の間や小貝にまじる萩の塵(秋) ・グループで句を詠む順を決めて連句づくりに取り組む。まず芭蕉の句が詠まれた状況を、該当するマスで確認してから脇句、第三句と付けていく。	**★連句会ワークシート、連句参考作品** １人１枚ずつ配布する。 定座などの式目(決まり)は、生徒の実態に合わせてどうするか判断する。 **●「おくのほそ道」俳句一覧**から生徒に好きな芭蕉の句を選ばせてもよいが、グループでの付句の変化や発想の違いを比較できるように指定してもよい。わかりやすく、子どもにも似た体験がありそうな４句を例として挙げた。取り組む時期や、学校がある地域なども考慮して指定してもよい。 グループ内でペアを決めて相談しながら句を作る。その場合作者名は連名とする。また、下書き用紙に全員が句案を書き、話し合って句を決定するのもよい。

	４．グループの連句を交流する ・挙句まで出来たグループはワークシートをタブレットで提出する。 ・各グループの連句について感想を述べる。	※連句について下記のページも参考にさせる。 **●日本の詩の歴史** **●「さみだれを」歌仙** グループの連句をスクリーンで提示、発想や変化のおもしろさについて注目させる。
まとめ	５．ふりかえりと次時の予告 連句会の感想や印象に残ったグループの連句について記入し、提出する。	芭蕉についての調べ学習が可能な場合は、「おくのほそ道」俳句すごろくを各自でやってみることを勧め、テーマを決めさせる。調べ学習の期間を設け、「私の芭蕉さん」レポートとして、発表会を行うこともできる。

※連句参考作品シートの作成についてはお茶の水大学附属中学校　宗我部義則教諭の協力を得た。
連句の創作指導については、お茶の水女子大学附属中学校紀要第 48 集(2019)に詳しい。
https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/403